

## 6月のヨーロッパ 自然と人と・・・出会いの楽しみ

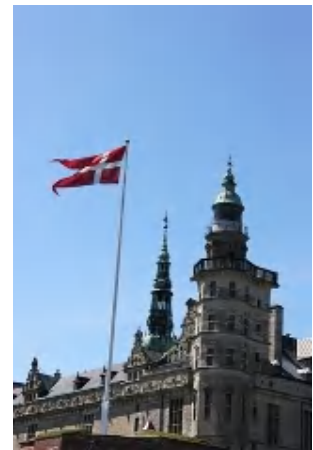
6月1日から10日までデンマークとドイツを訪問しました。定年後のライフワーク「世界文学紀行」の一環です。デンマークでは、昨年11月のイタリアでのシェクスピア作品に続き『ハムレット』の舞台となったクロンボー城と、アンデルセンの生家のあるオーデンセを訪れました。ドイツではグリム童話の舞台とゲーテ、ヘッセのゆかりの地を訪ね、さらにローレライ伝説を秘めたライン川クルーズ船に乗りました。

新緑から深緑へ。ヨーロッパは1年で最も美しい時節。湿度も低く快適でした。夏至に近いのでデンマークもドイツも、朝4時には明るくなり、夜も10時過ぎまで外は白んでいました。街には数百年の歴史が刻まれた重厚な建物が並んでいます。地方に行けば、どこまでも広がる田園と森と赤レンガの家々・・・シャッターチャンスにこと欠きません。

そんな訪れた各地で思い出に残る多くの出会いの中から、ちょうど10件を紹介してみましよう。

### 出会い その1 列車の中でのありがたい“助け舟”

コペンハーゲンを出た列車は北へ北へ。私はデンマークに着いた翌日、最初の取材地である『ハムレット』の舞台・クロンボー城に向かっていました。車中で車掌が検札に来ました。ちゃんと駅で買った切符なのに車掌は罰金を請求してきたのです。「買った切符に乗った駅での刻印がない」と言うのです。デンマークもその後に訪れたドイツも、日本のように駅の改札はありません。乗客は買った切符を乗るときにホームにある器械で刻印しなければいけないのです。そこまでは知らなかった私はそのまま悠然として座っていたわけです。



クロンボー城

その時に、前に座っていた紳士が「わざわざ日本から来たお客さんなんだから」と口をはさんでくれたのです。最初の取材旅に思わぬ“助け船”。見知らぬ土地で受ける親切や心遣いほど嬉しくありがたいものはありません。これが機縁で『ハムレット』の著作自身についても大きく話が弾んでいったのです。→ 「名作の舞台を訪ねて」に詳細

### 出会い その2 あなたは“静かさ派”それとも“賑やかさ派”？

3日目はアンデルセンの町オーデンセへ。特急で西へ1時間20分。私の切符は偶然にも車両の61番席でした。スタンダード（普通車）席ですが4人が向き合う形の間にはテーブルがあり、頭が揺れないようにヘッドレストもつき、飛行機のビジネスクラスくらいゆったりとしています。向かいに座ったのは30代と思われるデンマーク女性でした。まともに目を向けるのがはばかれるほど胸の谷間が大きく開いています。彼女はもう一つの空いて



昔の船着き場だったニューハン

は私も 40 年前には高校の教師をしていました」と仲間意識が出てきて少々勢い込んで話しかけたところ、彼女はあわてて指を口に当て「静かに！」とのサインをしたのです。

いるシートに足を伸ばすと赤い表紙の本を取り出しました。ブックカバーのタイトルは「Hegel」。「難しい本を読んでいるんですね。学生さんですか？それとも働いていらっしゃる？」  
「高校教師です。ヘーゲルは面白いですよ。これからオーデンセにある大学に行くところなんです」

「それは偶然ですね。実



アンデルセン博物館

よく見ると通路の上には「Stillezone<Silence zone>」（静粛地帯）との掲示があります。途中でアナウンスもありました。「車内では静かにお願いします。会話をされる方は別室でお願いします」と。

なるほど、なるほど、国民性とはこうも違うものなのですね。一般に日本の電車内も静かで、座っている乗客は寝ているか新聞に目を通していているか、最近では携帯メールに集中していますよね。

かつて私が現役時代に滞在していたラテン・アメリカではまったく反対でした。電車やバスの中は賑やかで、原色が塗られたバスの中ではビートのきいた音楽まで響いていたものです。あるとき研修会で訪日したパナマ人が帰国後に語った言葉の驚きは忘れられません。彼はいみじくも言ったのです。

「日本人はどこに行っても親切でした。でも“Tokio estaba muerto”（東京は死んでいた）」と。いつも賑やかな（日本人にはうるさいくらいの）中南米から、街も電車内も静かなトーキョーに行くと、このような感想を抱くのも当然なのかもしれません。

ところ変われば生き方も文化も変わるのです。そんな感慨を乗せながら、列車はどこまでも緑の平原を走っていたのでした。

### 出会い その3 カメラもドキドキ、美少女たちの撮影



「東京からのカメラマン」——こんな言葉が意外な神通力(?)を持っていた話です。かつて特派員だったといっても、写真はプロの域には及びませんでした。でも今回の旅には思い切って一眼レフのカメラを買ってきました。「ライン川クルーズもある。望遠レンズも必要だし！」と。そこで、アンデルセン博物館の受付に着くと自然のうちに上記の言葉が出てきたのです。

と、受付の女性は入場券と室内案内パンフレットを私に手渡しなが

ら言ったのです。「じゃあ入場料は無料です」。なんとありがたい！ 館内はフラッシュなしの撮影もOK。“じゃあ、精一杯アンデルセンのことを日本でPRしなくっちゃ”なんて新しいカメラのシャッターを押したのです。



「撮って、撮って！」とポーズをつくる  
かもしれませんよ」

ポーズを決めた彼女たちはとびきりの笑顔で私のレンズに収まったのです。予期しなかったハプニング。楽しい出会いの一つです。

続きます。建物の外の写真を撮っていると、後ろから声がかかってきました。「撮って、撮って！私たちが撮って！？」。振り向くと実にキュートで可愛い美少女8人ほどです。地元の高中生だといいます。私は少し冗談を交えながら言いました。

「いいですよ。撮ってあげましょう。こちらは東京からのカメラマン。もしかしたら美人の皆さんの写真は日本のどこかの雑誌の表紙に載る

#### 出会い その4 取材先でクッキングの腕前披露も

SGI（創価学会インタナショナル）のメンバーでもある私は、コペンハーゲンにあるSGI北欧文化会館も訪れました。近郊のノードハン駅から歩いて10分。白亜の文化会館は緑豊かな前庭や樹木と美しく調和していました。元理事長のカミオさんによると、現在はデンマークの教育界が創価教育に寄せる関心が高く、アスコア高等学校は池田大作SGI会長を顕彰、その庭園（池）にも名前を付けています。また創価大学や創価学園との交流も活発に進められているようです。

私は建物の周囲や屋内を撮影した後、この日の「守る会（会館の当番）」だという女子部員と懇談しました。彼女はこの日、会館で機関誌の編集作業をしていたメンバーと自分のための夕食を会館のキッチンで作る予定だが、ついでに私の分も作ってくれるといいます。

「それはありがたい。でも作っていただくだけでは申し訳ないから私がお手伝いしましょう。こう見えても、

自分は定年後に1年間クッキングスクールに通い、料理の腕はセミプロですよ」と大げさに宣伝したのです。さっそく彼女の指示に従い、野菜切りや調理の一部を手伝いました。鶏肉と玉ねぎ、インゲン、ピーマンを炒め煮込み、ココヤシで味付けをした料理は絶品の出来でした。

取材先の海外で包丁を握る。なんとまたうれしい体験！



SGI 北欧文化会館

## 出会い その5 ホテルのレセプションに「諸天善神」

コペンハーゲンからドイツのフランクフルトへ。鉄道が発達しているヨーロッパでは列車旅も楽しいものですが、残念ながらそんな贅沢な時間はありません。1 時間半の空の旅。そして空港からフランクフルト中央駅へは列車で 15 分。駅から歩いて 3 分でホテルに着きました。

5 日間の滞独中にはいっぱい訪問したい街があります。日本で自分で企画してきた旅なので、それに合わせて現地で鉄道切符等を確保しなければなりません。英語が通ずる都市とはいえ、駅名や切符などはすべてドイツ語です。相当の難行苦行を覚悟していたところ、なんとラッキーなことに、思わぬ助っ人が現れたのです。

たまたまホテルのレセプションに 40 代ほどの日本女性がいたのです。名前を S さんと聞きました。ドイツ事情に詳しく、ドイツ語も全く問題ない彼女が、私の取材予定に合わせてパソコンを操りながら、ラインクルーズのほかすべての旅の切符をアレンジしてくれたのです。

もし自分だけだったらとてもここまではできなかった。彼女によれば、いくつかのホテルを掛けもちしており、翌日は別のホテルが担当とのこと。事実その後の私のホテル滞在の 4 日間に彼女を一度も見かけることはありませんでした。となれば、勝手に解釈をすれば「彼女は私のために来てくれたようなもの」。感謝の心を込めて、一度、なぜドイツに来て住んでいらっしゃるのか、人生模様などいろいろお聞きもしたかったのですが、その機会もありませんでした。まさに仏教でいう「諸天善神」との出会いだったのです。

## 出会い その6 メキシコの医師との因縁の出会い

日本人といえば、6 月 5 日に乗ったライン川クルーズ船には約 100 人の乗船客の中に 9 人の日本人がいました。一家 4 人のグループ、年配の 1 カップルと若い 1 カップル、それに自分です。いろんな旅行社が集めたグループが一緒になって 100 人となっているものです。フランクフルト中央駅近くから出発した私たちのバスのグループは約 30 人。乗船場まで約 1 時間のバス内では、女性ガイドの軽妙な案内と進行で、全員が出身国の紹介をしました。



ライン川クルーズ船

ノルウェー、デンマーク、フィンランド、アメリカ、メキシコ、チリ、フィリピン、マレーシア、ニュージーランド、日本となかなか国際的な構成です。昼食時には他のグループからの日本人も一緒になって一つのテーブルに座りました。

「帰国のお土産を何にしようか?」「訪問先でよかったところはどこでしたか?」——お互いの情報交換が始まりました。ドイツに永住している娘さんに呼

ばれてきたという 70 前後の壮年は「ドイツではゴルフ三昧。道具もプレイ費も安いので

う満喫、満喫です」と。若いカップルは南イタリアから上がってきたようでした。

「ラテンの気質とゲルマンとは本当に違いますよね。どこに行っても陽気だったイタリアからくると、なんだかすべてが重い感じがしますね」

ラテンといえば、典型的なカップルに会いました。メキシコからの60代くらいの夫婦です。いかにもメキシコ人といった口ひげの立派な夫は真っ赤なシャツを着ています。夫婦で話し合っている懐かしいスペイン語に惹かれ、私も思わず話しかけてみました。

「Soy de Tokio (私は東京からです) が、メキシコはどちらからですか？」

「メキシコ湾岸のベラクルスよ」

「エッ ベラクルス？ 私も行ったところですよ。もう20年以上も前だけど」

かつてラテン・アメリカの特派員だった時代に何回か訪れたものですが、標高2400mのメキシコ・シティが涼しかったのに対し、海岸都市のベラクルスは湿度も高く暑かった。そのせいか体調を崩し一度はひどい下痢をして医師の世話になったこともある。そんな思い出を話すと、なんと「Soy medico, tambien (自分も医者なんですよ)。旅の留守中の病院は息子に任せて来たんです」と。

同じベラクルスの医師といっても、もちろん私がお世話になった医師本人ではない。それでも土地柄と職業のあまりの偶然の一致に話はさらに弾んでいったのでした。世界は狭いものですねえ！！

## 出会い その7 女性バイオリニストの温かな心遣い

もう一人の在住日本人の話をしましょう。私はグリム兄弟が生まれたハウナウから列車で兄弟の博物館のあるカッセルに降り立ちました。

駅の案内所で行き方を確認すると、博物館の近くまで行くバスは出てしまったばかりでした。やむを得ず、次の手段を考えようと駅のベンチに腰を下ろしました。と、「日本からいらした方ですか？」とやさしい女性の日本語が聞こえてきたのです。目を向けると彼女の手にはバイオリンのケースが握られています。

「ええ、これからグリム兄弟の博物館に行こうと調べているんですよ」

私が見せたパンフレットを覗いた彼女は、次のバスまで時間があるし、ドイツ語がわからないとここでのバスの移動は難しい、少しお金がかかってもタクシーを使った方がよいこと、などをアドバイスしてくれました。親切な説明にお礼を言いながら、私はカッセルの町や彼女のドイツ滞在の動機などについても聞いてみました。



グリム兄弟の像



渡独して3年目。今、カッセルのオーケストラでバイオリン奏者として働いているのだといいます。

「それは偉いですねえ。でも日本ではダメなのですか？」

「ダメなことはありませんが、こちらにはいっぱいオーケストラがあつて働く場や勉強の場もあるのです」

「じゃあ、健康に気をつけて頑張つてね」

私は自分の娘を思いやるような気持ちで激励の言葉をかけたのでした。ほんの10分ほどの歓談でしたが、何かほのぼのとしたものが胸に残ったのです。見知らぬおじさんに声をかけ、いろいろと助けてくれようとしたやさしい日本のお嬢さん！どうか願いどおりの道が開け、未来に幸がありますように！

## 出会い その8 世界は「混ざり合う方向」へ動いている！

ヘルマン・ヘッセが育ったカルフに行く途中のことです。特急列車のテーブルつきの向き合った4人席の私の前には肌色の浅黒い男女が座りました。男性はひげが濃く、女性は額の真ん中に赤黒い斑点があります。もしかしたらインドからかもしれないと、私は遠慮がちに声をかけてみました。

「いえ、自分たちはスリランカ生まれです。現在、自分はスイスの時計工場です」

「ほう、それでどうして今ドイツに？」

「今日はホリデー。しばらくぶりにドイツに住んでいる兄弟を訪ねてきたのです」

陸続きとはいえまったく自由な往来のようです。そういえば自分がデンマークからドイツに入国するときも入管の手続きも荷物チェックもまったくありませんでした。ヨーロッパの各国がEUになってから、一度EUのどこかの国に入ると、それ以降は他国へもほぼ国内の移動のような扱いになるとのことです。アメリカ、中南米を回っていた特派員時代を思うと夢のような現実です。スリランカからの夫婦も、そんな自由の中での動きなのでしょう。

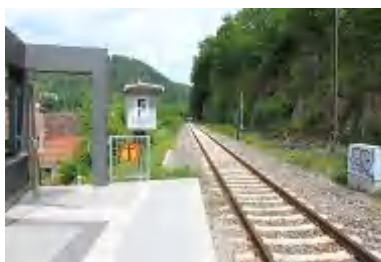
将来的にも数々の解決しなければならない問題が山積しているとはいえ、世界は間違いなく混ざり合う方向に進んでいます。このことを島国に住む、どちらかといえば閉鎖的な日本人の私たちもよくよく認識し心していかなければならないと思った次第です。



あこがれの作家とツーショット

## 出会い その9 車内に自転車を持ち込める便利さ

特急列車から途中で普通列車に最後は真っ赤な色の1両だそこでは面白い光景を目にしんできた乗客の何人かは自転車です。車内は片側に2列には1列に椅子が並んでいた



車に乗り換ええました。さらけの田舎列車になりました。ホームから乗り込んできた乗客の何人かは自転車です。車内は片側に2列の座席が並び、反対の片側は1列に椅子が並んでいたのですが、乗客が少ないの

でその座席は上げられて、その空間に自転車は立てかけられたのです。

興味を惹かれその動きを注視していると、電車が大きく横揺れしたはずみに 1 台の自転車が倒れてしまいました。自転車の前の籠の中にあつた小物が室内に散乱しています。とっさに自転車の持ち主の壮年はすぐ近くに座っていた高齢の婦人に謝り声をかけました。ドイツ語で意味はわからなかったものの、しぐさからはっきりと次のように伝わってきました。

「すみません。大丈夫だったですか？お怪我はありませんか？」

「ぜーんぜん、大丈夫ですよ。お互いさまのことですから」

きっと彼女もときどきは自転車を車内に持ちこむこともあるのでしょう。フランクフルト中央駅の構内でも自転車を引いているドイツ人をよく見ました。特急列車では許されないようですが、地方列車のかなりが自転車の持ち込みを許可しているようです。駅構内のエレベーターも自転車を運べるようになっていました。デンマークほどではないようですが、ドイツも自転車の国、こんなシステムはきっと市民にとっても便利なのに違いありません。

その後は 1 台の自転車も倒れることなく、列車は美しい山間をときどき揺れながら登っていったのでした。

## 出会い その 10 ワールドカップ=タクシー運転手の辛辣な評価

ドイツ滞在の最終 1 日前の夕方、ゲーテハウスを訪ねました。5 日間もフランクフルトに滞在していながら各地を訪ね歩くことに忙しく、一番近い大事な訪問場所が最後になってしまったのです。あいにく軽い雨が降り始めていました。私はホテルの前からタクシーを拾うと行き先を告げました。フランクフルトへの旅行者のほとんどが訪れるという見学コースの中の一つです。運転手は“お茶の子サイサイ”といった雰囲気でもハンドルを握っていました。ドイツでは比較的少ない黒人の運転手。そのしぐさや英語の濁りが面白かったので私は話しかけてみました。

「母国はガーナよ。こんどのワールドカップには期待しているぜ！なんてたってアフリカが開催地、地続きの舞台だからね」

そういえば帰国直後にはその試合が始まります。出発前の国内のニュースでもいろんな形で取り上げられ話題にもなっていました。日本はカメルーンと対戦することになっています。そこで、運転手に正直なところの勝敗予想を聞いてみました。

「そりゃあカメルーンが勝つに決まっているサ。だって実力が違う。点差はそんなにつかないだろうけど、まあ自分の予想では 2-0 だね。うちのガーナだってニッポンには負けっこないネ」

やっぱり身びいきの予想。そこで参考までに対オランダ、デンマーク戦の彼の“ご託宣”も聞いてみました。そしたらなんと・・・

ゲーテハウス

「オランダは優勝候補、どれだけ点差がつくかなあ！？ デンマークの実力も日本の比で



はない。まあこちらは5-0だね」

なんと、母国をずいぶんナメたものである。少々癪にさわる返答だがここで“ワレニッポン代表”なんて思って反論をしても仕方がない。ここドイツだってサッカー王国、4年前の開催地だ。正直、彼の、また彼らの認識はそんなところかもしれません。それでも今年の岡田ジャパンには特別の期待を寄せて、私は翌日の帰国フライトに身を任せたのでした。



(帰国後のカメルーン、オランダ、デンマークとの試合結果はテレビで見たとおりです。ガーナの運転手さんよ、確かにあなたの母国も8強とすごかった。でも今のニッポンチームの実力も少しは見直してくれたまえぞな、もし！ 写真:blog goo から)